

北海道の専門劇団、「劇団さつぽろ」の五七年を振り返る

金田一 仁志

このタイトルから、ああ劇団さつぽろもいよいよ解団か、と思われた方も多いだろう。今すぐではない。すぐではないが、しかし……。

振り返るにはずいぶん半端な年数だが、創立からの資料を入手したこともあり(くわしくは後述)、北海道初の、そして当時唯一の専門(プロ)劇団がどのようにして生まれ、発展し、今に至っているのかを資料と共に見ていこう。

その中に、五七年も前の北海道で「専門演劇人」を目ざした若者たちの葛藤、そして過ぎ去りし時代の断片が見えてくるはずだ。若い皆さんには新たな発見となるかもしれない。

ここに劇団の創世記(一九五九年)から最盛期(一九八三年)までの活動を記す。

文責・金田一仁志(一九七八年から劇団さつぽろに在籍。現在は北海道教育大学・藤女子大学非常勤講師。北翔大学北方圏学術情報センターポルト研究員《舞台芸術研究グループ》。尚、文中の敬称は略させていただきます)

そのメールが送られてきたのは暮れも押し寄せた昨年一二月。劇団代表の西村善孝(六七才)からで、「今、劇団の資料片っぱしから捨てている。お前の写っている写真、欲しかったら取りにこい」という実に乱暴な内容だった。急いで稽古場に電話を掛ける。西村が出て、すでに整理(いや処理!)は始まっていて捨てた物も多いと言う。たいへんだ、劇団の歴史の第一級の資料が明日にはゴミとなってしまう!僕は稽古場へと走った。そしてお願いしたのだ。「論文を書くのに当時の資料が必要だ。捨てるんだったら、それ全部貰えないだろうか?」と。

劇団の稽古場は西区宮の沢にある。入団した当時は地下鉄がここまで伸びるなんて思ってもいなかったし、「白い恋人サツカー場」は野原だった。通うには国鉄バスに乗り(急行は止まらない)「宮の沢」で下車。ホテルポルボの看板を折れ山に向かう(余談だが当時ホテルの看板があったところに、今は本物のVOLVOショールームが建っている!)。坂の途中、このあたりで一軒だけの酒屋、本間商店(現スパイ宮の沢店)の手前を左に折れると、劇団は指呼の間だ(写真1)。札幌駅からはバスと徒歩合わせて小一時間だったと記憶する。

劇団さつぽろと僕は
 同い年だ。劇団は
 一九五九（昭和三四）
 年四月、僕はその年
 の一月に生を受けて
 いる。劇団の歴史
 と僕の成長はモロカ
 プリなのだ。



写真1 劇団さつぽろの稽古場

劇団さつぽろ

創刊号

昭和 54 年
12 月 1 日発行

札幌、南7西25
劇団さつぽろ
TEL(4) 7459

半年目を迎えた劇団の反省

北回にも早や雪の降る季節がやって来まし
 た。今春誕生した「劇団さつぽろ」も、やっ
 と半年目を迎えています。充足当初の目標
 や理想には一つもありませんが、この半
 年の間、現実問題に打ち当たると、多く
 の反省すべき点や弊害を感じて、一つ一つ
 らを解決しよう。と私は努力始めておりま
 す。

あまりに場を広げすぎた内容の打ち出し方
 と自分たちの力不足のアンバランス―専門劇
 団という形式へあまりに依存しすぎた甘
 い考え―実際に出来上がった作品の未熟さ―
 そして劇団の不成熟と限りありません。
 その上、その各々が大きな課題であるこ
 と。私たちはいかに夜はぬき捨て、もう一度
 出発するつもりで、じつくりとそれらを取り

(十一月初冬)

34年度愛媛レポートリイ	
第4回試演会	演劇と音楽によるドキュメンタリー
12月20日	大塚 三太郎・詩と音楽によるドキュメンタリー
12月20日	ウィリアム・シャクソフ 一幕
12月20日	おーい、救けてくれ 一幕
12月20日	12月20日 (詳細は次頁に)
第5回試演会	演劇と音楽によるドキュメンタリー
大塚 三太郎	ウィリアム・シャクソフ 一幕
おーい、救けてくれ 一幕	12月20日 (詳細は次頁に)
明年2月下旬	公演未定

写真2 劇団さつぽろ広報誌の創刊号

北海道初の専門劇団「さつぽろ」は産声をあげたのだ。実は僕の名前もこのイベントに関係している。すでにタカオという名が決まっていたのだが、早川という産婆さんが「今年は見出た年なんだから、天皇家から一文字もらっちゃいなさいよ」と言つて「仁志」と

公演・試演会・学校巡演について

今年七月に予定していた第一回公演「ミュージカル「リリ」」は運営、経済面の都合で来年度に延期しましたが、日時、場所は未定。また過去三回催した祝祭会も、第四回より祝祭会と名称を変更し「レバ（作品）も全面的に改めました。尚、小中学校巡演も来年度四月より実施出来るように、現在レバの検討を進めております。

（危うくゴミの山！）から、劇団のプロフィールを紹介していこう。

写真2は、劇団の活動を外部に知らせるための広報誌の創刊号。一二月一日発行とある。劇団の「團」の字がなつかしい。二ページ目の「半年の歩み」では、四月一〇日に中島児童会館で上演した「三匹の子ぶた」が第一回の公演（旗揚げ）となつている。注目いただきたいのはそのイベントのタイトルで、なんと「皇太子御成婚記念子供劇場」だ。そう、五九年は民間から皇室に初めてお嫁さんが入つた記念すべき年（現皇后、美智子様だ）。四月一〇日は御成婚当日。東京ではお二人を乗せた六頭立ての馬車とそのパレードを見ようと五三万人が道道に集まつた。国民の祝日となつたこの日に、

いう名がついた。天皇家の男性には皆「仁」がつく（現天皇は明仁）。いい名前をもらったと事あるごとに言われ、自身もそう思っていた。小学校に上がるまでは：そう、同級生の名前に、やたら「仁」「明」「裕」が多いのだ。女の子にも仁に美しいで「ひとみ」がいたし、美智子そのままでは畏れ多いと考えたのか、「道子」という名前もあった。きつと早川さん、行く先々で「天皇家から一文字もらっちゃいなさいよ」を連発していたに違いない。

日録二〇世紀から、この年を見てみよう。

死者行方不明者五〇九八人を出した伊勢湾台風があった年だ。金の卵と呼ばれた中・高卒業生を乗せた「集団就職列車」第一号も登場している。日本麦酒（現サッポロビール）はビンにかわり、スチール缶（アルミではなく鉄。サビました）に入ったビールを発売。缶切りで天面に二カ所の穴をあけ飲んだ。このスタイルはブルトツプ缶が一般化するまでの一〇年以上続いたと思う。小学生の頃、「粉」ジュースに変わって登場した缶ジュースもそうだったからだ（穴あけ用のツメが缶にセットされていた）。その前年には東京タワーが完成しているのだから、まさに高度成長の幕あけ、言いかえると大量生産・大量消費時代の始まりの頃。映画「三丁目の夕日」の時代といえ、若い皆さんにも想像していただけるのではないだろうか。国民の多くが夢を持ち、将来へと大またで歩きはじめた頃である。

広報誌に話を戻す。その年の上演作品は「三匹の」の後すぐに「はだかの王様」そして「イワンの馬鹿」「北

風のくれたテールブルかけ」「宝物」「赤い羽根」「四ツ星の物語」「ある音の恐怖」と続く。かなりのハイペー

スだ。よほどのエネルギーがないとこれだけの公演は打てないだろう。写真3は「はだかの王様」。初演時の貴重な台本。表紙の手書きの文字は水性ペンで書かれたように「だ」の文字が滲んでいる。本編はワラバン紙にガリ版印刷だ。これが当時の主流で、きつと団内にも文字書きのプロ、ガリ刷りの名手がいたに違いない。さてここで重要なのは「移動演劇教室用台本」という一行だ（掲載した写真では読み取れないかも知れないが）。後に劇団活動の柱となる移動演劇「地方巡演を提言していた者が、この時期にいたことになる。頭の片隅にちよつと置いておいてほしい。

翌六〇年、「アンネの日記」上演、写真4の演者の表情は、それまでの児童向け作品とは一線を画している。六二年には「ピノッキオ」



写真3 「はだかの王様」台本



写真4 アンネの日記

で札幌市民芸術祭奨励賞を受賞。知名度も上がったのか別の資料（二〇周年記念誌）には「劇団としての活動が軌道にのる」とあった。そして翌年の「トタンの穴は星のよう」で、ついに道内の巡演（地方巡回公演）がスタートする。

移動演劇教室と書かれた「はだかの王様」から、はや四年。その間劇団員たちは、どうやって食いつないでいたのか？そして実際の巡演まで、なぜこんなに時間がかかってしまったのだろうか。

劇団創立メンバーの一人、今野史尚（七七才）に話を聞いた。

「当時は札幌美術学園が経営する幼稚園を借りて稽古していた。収入は0（ゼロ）。もちろん交通費も出ないから皆、円山南（現在のモイワ下あたりか？）まで歩いて通っていた。よっちゃん（後ほど登場する俳優、吉川雅喜）はお姉さんのスナック手伝ってたけど、オレは勤めていた染め物問屋やめちゃったし、ん〜、何やって食っていたんだろ？本当の貧乏やつていると優しい人も現れて、お米持ってきてくれたりね…あまり良くおぼえてないけど、死なずに済んだことだけは確かだ。」

若い頃の苦労は買ってでもしろ、と教わった時代だ。しかし将来、演劇人として成功するかどうかもわからない四年間は、正直良かったに違いない。実際、やめていった仲間も多かったという。そして核心の「なぜ巡演を実行するまでに時間がかかったのか」である。その質問に今野はこう答えている。

「札幌に専門劇団をつくる、という旗印のもとに人が

集まった。全員が地方巡演を目ざしていたわけではない。しかし第九回の試演会（前述の『アンネ〜』）までは赤字続きで、釧路の『虹の会』の加藤さんから『こつちで演ってみないか』とお誘いがあった時、悩んだ。でも今のままではどうにもならない。それで『札幌以外でもやってみようじゃないか』ということになって、やっと巡演がスタートしたんだ」。

なるほど。つまり劇団旗揚げ時のメンバーは、こと巡演に関しては一枚岩ではなかった（団員同士の葛藤があった）。しかしこの巡演以降、劇団にとつての大きなニュースが続く。七六年、念願だった自前の稽古場が完成。長くお世話になった山の手の八田バーベルクラブ二階（オーナーの八田信之さんは国体にも出場していて、後の札幌市議会議員。僕も独立時にはパンフレットに「八田ふとん店」の広告をいただいた。感謝！）から新天地、宮の沢への引越した。写真5（次頁）は七四年の北海道新聞夕刊。「新しい稽古場に看板を掛ける劇団員」とある。

あれ？劇団の稽古場完成は七六年では？そう、正確に言うところの写真は建設計画第一期工事のプレハブ小屋。すぐ後ろに新稽古場が建つのはこの二年後だ。僕の入団時はかろうじて健在（？）で、昔のプレハブだけに実に風通しが良かった。冬は一階の汲み取り式の便所が凍った。水だけではない、排便が、である。凍った便の上に次の便が重なって凍り、いつしかそれは和式便座のラインを越えマッターホルンのごとく天を指した。その氷塊（うんちですけど）を木の棒でくずすのが新人、つまり

れていたにもかかわらず、稽古の帰り「金坊、ちよつとつきあえ」と本間商店に寄り、止める間もなくカウンターで焼酎のワンカップをクイツと空けていた。女房役だった長谷川京子と三人、今ごろは天国で芝居談義に花を咲かせているだろう。演出は東京の劇団民芸から招いた飯田信之。仮面をつけた五人のコロスが心の内を演ずる、実に面白い芝居だった。

さて、僕のデビューは同年の巡演作「チポリーノの冒険」。写真7、中央右で果実のヘタの帽子をかぶっているのが僕。役名は私立探偵えんどう豆。「金田一だから探偵でいいだろう」と、演出家計良光範（昨年三月、七〇才で永眠）が決めた。

活発に演劇の製作を行っていた稽古場の、中を写した写真が一枚だけあった。写真8だ。「大どろぼうホッ



写真6 狐とぶどう



写真7 チポリーノの冒険

写真9 トラックから荷をおろす



写真8 稽古場

ツェンプロッツ」で大魔法使いを演じる僕（右の三角帽）。演出の舛井も共演の女優二人もストープにくつつくように稽古を見ている。教育文化会館の小ホールとほぼ同じ大きさの稽古場はタツパ（天井までの高さ）も有り、二台の灯油ストープでは暖を賄いきれない（寒かった!）。

その地方巡演を支えたのが念願のマイトラック、マツダのタイタンだ。

青のハイエースに九人、タイタンに三人の計一二人で、東北以北の町を、村を廻りにまわった。写真9は体育館に横つけたトラックから荷おろしする劇団員。事務局長だった故・林中直樹の残したこれらのスナップこそ、当時の劇団の活動を語るうえで、たいへん貴重な資料だ。そしてこの頃から、写真は総天然色（カラー）に変わる。

学校公演の観劇料についても触れておこう。「チポ

男のセットで、五本の柱のナナメに天板が載っている(写真12)。役者はその上を下をに自由にかけまわり、リスやエゾテンの動きを演じた。この大きなセットが向きを変えることでシーンが変わるといふ転換は斬新だった。「ユック」と並行した小学校公演「とべとべヒコーキ乙型2号」も人気があった。

体育館のまん中に組んだ円形舞台に、部品をかかえた演者が集まって、観客の目の前で一台の飛行機を組み立てて行く(写真13)。僕は初演しかつきあっていないが、資料によると巡演は三年に及んでおり、その評判の良さがわかる。

さて、一団員として劇団の内側から活動を紹介してきたが、社会的に見て劇団さっぽろは北海道でどのような役割を担ってきたのだろうか？僕が入団を決めた年、

七十七年五月の北海道新

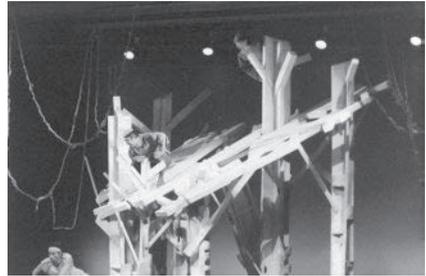


写真12 ユック



写真13 とべとべヒコーキ乙型2号

聞(写真14次頁)を要約する。まずは記者の目線から。「演劇に接する機会のない子どもたちのために積極的に山間へき地にまで足を延ばし、これまでに十万人近い児童生徒たちに演劇の楽しさを伝えてきた」とある。では当時、一作品の公演回数はどれくらいだったのか。同記事の鈴木喜三夫(当時の劇団代表)のコメントには「学校側の要請が多すぎて一年では道内を回りきれない。(中略)昨年は百十六日間で百八十六ステージ。今年もほぼ同様」だから、この「チポリーノの冒険」だけで二年間に四〇〇ステージ近い公演を行っていたことになる。この七十七年から八三年を劇団の最盛期と捉えるのに異議のある者はいないだろう。

さて、僕はその八三年、巡演生活にピリオドを打ち自分の劇団を旗揚げしたが、請われて劇団さっぽろの後援会長となり演劇研究所(夜間、一般の皆さんが演劇を学べる場所)を再開、土曜朝には(学校五日制をにらみ)子どもたちの為の「劇団児童部」を立ちあげた(写真15、49頁)。巡演に出たあとの稽古場の「空き」を、なんとか埋めようと考えたのだ。すでに劇団員ではなかったが、結果四〇年近く、この劇団さっぽろと関わっていることになる。

だから劇団の衰退を、だまって見ているわけにはいかないのだ。

そう、現在の劇団には後援会も研究所も児童部もない。もつと言えば劇団員(社員)もない。新しく代表となった西村が、すべて「めんどろな」関係を切り捨てたからである。

びに役者を集めるのであれば、それは正解だろう。しかしその寄せ集めの活動を「専門劇団」と呼んでいいものか？

どれだけ貧乏であつても、吹きだまりと呼ばれたその稽古場には「夢」が詰まっていた。まだ成功者と認められていない小説家、絵描き、詩人らが出入りした。今や世界的バレエダンサーの坂本トキヒコ君（札幌開成高校出身）は二〇歳の頃に足を運んでくれたし、札幌舞踊会の千田モト先生とのおつきあいは、先生が亡くなるまで続いた。

そう、劇団は、ジャンルの違う文化人たちの交流の場でもあつたのだ。事務局長（後に代表）、林中の葬儀も忘れられない。遺体を稽古場に運び、まわりで日本酒を廻し飲みするという「劇団葬」だった。照明家、佐々木恒心のライティングは秀逸で、銀色に輝く布団に仰向けになった林中は、まるで眠っているかのようにだった。飲みながら「ハゲ、ハゲ」とおでこ（頭）を叩く参加者は一様に目に涙を溜めていて、ああ、こうして送られるのいいな、と生まれて初めて、そして心から僕は思った。



写真 15 劇団児童部

そう、今や物置と化した稽古場には様々な思いがギョツと詰まっている。そして捨てられる筈だった資料こそ、実在する当時の「夢のカケラ」なのではないだろうか？

このカケラの数々を、若い皆さんに伝えたい。先達が歩んできた、「北海道演劇人」の記録として！

創立メンバーで元代表の鈴木喜三夫に電話をかけた。「メモ一枚に至るまで残しておいてほしい。北海道文学館ではまだ演劇というジャンルは確立されていないが、きちんと管理したい」とのことだった。嬉しい。とりあえずカケラの行く先が決まった。

紙幅が尽きた。

時は移ろい、人も変わる。うまく行かないことを故人のせいにしても仕方がない。それよりも「今、あるもの」から再スタートは出来ないだろうか。

劇団としての歴史がある。体育館を劇場に変える技術もある。なにより他の劇団がうらやむ広い稽古場が、地下鉄徒歩一五分にあるではないか！

作家、菊地慶一氏が言うように「進むべき道が分からない時は、後ろを振り返る。そこに未来が見える」は本当だと僕は思っている。

若い皆さんの中には、僕らのようなアナログな頭（発想）を簡単に飛びこえてしまふ、素晴らしいアイデアをお持ちの方もいるだろう。どうかご教授いただきたい。北海道の財産を未来に残すために。